

第二分科会 分科会テーマ「学校図書館と公共図書館との連携を探る」

～図書館を使った調べる学習支援の連携と物流の連携～

世話係：下平 達郎氏（中川村図書館長） 司 会：小林 光希氏（飯島町図書館長）

講 師：佐藤 達生氏（図書館振興財団事務局）

発表者：塩澤 涼子氏（駒ヶ根市立図書館）大嶋 恵氏（駒ヶ根市立図書館）辻井 まどか氏（茅野市立図書館）

1 講 演 「図書館を使った調べる学習コンクールの取り組みについて」

- ・調べる学習と「図書館を使った調べる学習コンクール」 図書館をより使ってもらうため考え始まった。大人よりも子供に図書館へ来てもらうため。ノンフィクションの本をより使われるように。
- ・学習指導要領からみた調べる学習 主体的・対話的で深い学びを育むなど学習指導要領とコンクールの目的が合致している。調べる学習によって、知的好奇心、行動力、文献・資料を活用する力などが身に付く。
- ・地域コンクールの開催メリット 地域の活性化、図書館利用の促進、サービス向上など図書館のメリットも多い。入賞作品に共通して自分の地域について調べることが多い。子供に地域の魅力に気づいてもらえる。
- ・調べる学習の力 地域活性化への発展 地域コンクール開催自治体数現在 132。応募数も第1回 925 から第21回 91,908 へと 10 倍近く増えている。また、日本以外の国への広がりもある。
- ・その他 コンクールを主宰する自治体の規模は大小問わない。学校では書き方等の指導で、強制的に参加させるのはあまりよくない。いきなり地域コンクールを開催ではなく、個人で送れる一時審査へという手もある。過去の賞をとった作品はHP上で閲覧可能。

2 発 表 駒ヶ根市立図書館：図書館を使った調べる学習支援の連携について

(1) 第1回駒ヶ根市の図書館を使った調べる学習コンクール実施報告

図書館を使った調べる学習の普及、子供が自ら考え表現する力を育む、応募された作品を評価することで図書館活用の指導力を高める、地域や郷土に目をむけるきっかけづくりなどを目標に開催
開催にあたり、連絡会の設置、事業への助成金申請、調べる学習ガイドブック作成、相談会の開催
応募作品数 224 点（参加人数 329 人）最終審査へは 77 点をコンクール事務局へ提出
コンクール後入選作品の巡回貸出、調べる学習ガイドブックの作製

(2) 駒ヶ根市における図書館の連携

図書館システムのネットワーク化・本館と2分館を含む市内全小・中学校図書館が共通システムを使用
共通のシステムのためお互いの蔵書が見える。共有フォルダの活用による情報の受発信
公共及び学校図書館司書の人事異動、市内司書会をおこない交流をしている。
調べる学習コンクール、サードブック事業、家族読書の日など共通事業として取り組んでいる。

茅野市立図書館：公共図書館と学校図書館をつなぐ～物流による調べ学習について～

- ・多数の学校を有する都市部公共図書館と学校図書館の連携事例 『学校図書館資源共有化モデル地域事業』の一環として平成 15 年度から流通システムの稼働・運用を行っている。毎週火・木曜日に公共図書館と学校図書室を委託した業者が回る。ただし、公共図書館と学校のシステムは別のため、検索・予約は学校側からは可能だが、公共図書館から学校はできない。
- ・物流による調べ学習支援について 茅野市内物流合計冊数 29,673 冊（H29 年度） 調べる学習に必要な本が計画的に取り寄せられる。必要な本が一箇所ですらえられる。

3 まとめ

- ・分科会参加者による意見交換、各地域での学校図書館と公共図書館の連携について
- ・講師の先生から：新しい事をやる時、犠牲者を出さない。損をする人を出さず、外から喜んで来てくれる人を連れてくるのが良い

第3分科会 分科会テーマ

「いきいきとした学校図書館を創造する司書教諭の役割～学校司書との連携のあり方～」

助言者 広川芳守（信更中学校）

司会者 源関昭博（屋代小学校）

発表者 伊藤光恵・今井裕美（湖南小学校） 高橋美嘉・水口みのり（佐久穂小学校）

1 発表の概要

(1) 湖南小学校の実践から

①連携を円滑にするために

・学校司書・司書教諭の勤務時間や勤務形態の違いを補うため、「連絡ノート」を活用

②学校司書・司書教諭の役割と現状の確認（諏訪市内 小中学校図書館マニュアルに沿って）

・「連絡ノート」を通じて、二人の役割分担を確認

・司書教諭は教育的な仕事を受け持ち、学校司書は事務的な仕事を受け持つことが原則だが、購入図書の見直し、利用指導、図書館だよりの作成など、図書館運営の多くを学校司書が受け持っている現状があった

③今年度の取り組み

・年間利用指導計画の作成

・授業で使う資料の作成と収集、提供 … 学習単元と図書資料の一覧、図書館の見取り図 他

・学級担任と学校司書をつなぐための「図書館連絡カード」の作成と利用

・ブックトーク、ビブリオトークの実践 … 児童の読書への意欲、認められたことへの満足感

④学校司書と司書教諭の連携に関わって

・二人の間で意識してコミュニケーションをとる。確実に文字が残る「連絡ノート」を活用する

・役割分担を確認し、学校司書の先生が行っていることを知った上で、司書教諭もできることを実践していく

・学校司書は司書教諭に頼むのは無理だろうと決めつけて業務を抱え込むのではなく、情報を共有して子どもたちのために動くことが大事

(2) 佐久穂小学校の実践から

①読書の幅を広げるために、読み聞かせやおすすめ本の紹介をする

・図書館教育年間指導計画を参考に、学校司書が学級での図書館利用時に読み聞かせ

・司書教諭は各学年の教科学習に合いそうな本を学級担任に紹介し、本を手渡しする

・図書の展示会や巡回図書を利用して、学級担任にも選書と呼びかけ、新着本は分野のかたよりにくいよう気をつけながら、1ヶ月ほど特設コーナーに展示

・読書感想文の課題図書や教科書で紹介されている本、学校行事や授業に関係した本などを司書教諭と学校司書とで選んで展示

・図書委員、図書クラブの児童が選んで展示 … 子ども同士の情報交換につながる

②司書教諭として授業をする

・今までの研修を生かし、3年生に向けて『百科事典の使い方を知ろう』の授業をした。『ポプラーディアワールド』というサイトにあるワークシートや指導案が参考になる

③図書館を教科学習に利用してもらう

・資料（学校司書）、授業のアイデア（司書教諭）を提供する

・学習の成果を図書館で掲示

④学校司書と司書教諭の連携に関わって

・司書教諭は図書を教科学習に生かすことができ、学級担任との連絡が取りやすく、個々の子どもの様子を把握しやすい。学校司書は専門知識と授業以外の場を子どもに提供することができる。両者の意識的な連携で、より魅力的な図書館になる

2 討議の概要 「Let's enjoy Bibliobattle」

(1) ビブリオバトルについての説明

・ビブリオバトル = おすすめの本を持ち寄って紹介し、チャンプ本を選ぶゲーム

・やり方 … 決められた時間の中で ①自己紹介/紹介する本の提示 等

②この本をすすめるポイント

③まとめ直し をどのように進めるか構想し、

人数に合わせた方法で全員の本を紹介する

最後にチャンプ本を選ぶ

(2) グループごとのビブリオバトル

・今回は時間の都合により一人3分間で行った

・持ち寄った本との出会い、おすすめポイントなどを順番に熱く紹介。本のジャンルに制限がないため、ガイドブック、海外小説、ノンフィクション、児童書、コミックエッセイ、YAなど、多様な本が紹介された

・最後に指さしでチャンプ本を決定

(3) 各グループのチャンプ本の紹介

・各グループのチャンプ本を全体の場で紹介

・本そのものが持つ魅力に加え、発表者によっては本の一節を朗読するなど紹介の仕方にも工夫があり、「この人が」「この本を」「こんなふうに」紹介するんだ、という様子から、様々な情報を共有することができた



3 まとめ

○分科会が始まった時と、ビブリオバトル後の、参加者の表情の違いがとても大きい。本を通して、初対面の人たちとも関わりを持つことができていた。

○分科会のテーマに沿って、司書教諭と学校司書の二人でレポートの作成・発表をしていただいた。どの学校でも、それぞれの立場から学校図書館の運営に協力し合っていきたい。今年度は二人で一緒に参加してもらってよかった。

○ワークショップ形式で、参加者にも実り多い時間となったと思う。今後もこのスタイルを継続していきたい。

○明日からの実践につながる提案に感謝したい。

第4分科会 分科会テーマ 「力をあわせて魅力ある図書館づくり」

～みんなとつながるサポーターとしての学校司書～

助言者 浅井 かよ子（千曲市立更級小学校）

司会者 林 綾子（上田市立第三中学校）

発表者 レポート 蓮井 冬華 町田 都（安曇野市穂高南小学校）

中嶋 和恵 神戸 真由美（松本市立源池小学校）

事例紹介 西原 いづみ（中野市立高丘小学校） 林 綾子（上田市立第三中学校）

大井 明子（長野市立柳町中学校） 宮下 明希子（千曲市立更埴西中学校）

1 発表の概要

事例発表

<穂高南小学校>

学校図書館教育協議会資料から

・アンケート結果より 司書・司書教諭の役割について 公共図書館の方から

・昨年度の活動から 事例：『百科事典を使いこなそう』ポプラ社の出張授業

魅力ある図書館づくりのために 今後の方向と課題

・年間計画を整え、周知できるようにしていきたい。

・市の公共図書館「みらい」と連携していく方向も検討したい。

・調べ学習にデータ管理と広報活動 ・時間をとって多くの先生方と連携を図りたい。

<源池小学校>

学習・情報センターとして

図書館びらき・・・オリエンテーションは図書館の使い方のほか、読書の楽しさや資料の探し方が、学年毎ステップアップできるように計画をたてていく。

授業支援・・・担任からの依頼により子どもたちの「おたすけ窓口」として相談にのる。

読書センターとして・・・担任から、子どもたちから、常に情報をキャッチする。

授業支援 図書委員会との連携

環境づくり・・・図書館への導線作り 館内環境作り

学校図書館としての利用法を周知し、職員の図書館教育への意識が変わっていくことで「活用できる学校図書館」「使える学校図書館」「応える学校図書館」「必要とされる学校図書館」へ変わっていけるのではないかな。

レポート発表

<高丘小学校> 学校図書館づくり

1. 頼られる図書館づくり「図書館に行けば何でも調べられる。頼りになる。」

・図書標準冊数・蔵書配分比率を重視。

2. 新鮮で活気のある図書館づくり「児童を図書館に引き寄せるには。読書習慣づくり。」

3. 課題 個人情報観点から代本板、読書カードをなくしていくには…図書館の仕組みがわかるようになること。

<第三中学校> 中学における朝読書 ～朝読書をもっと楽しむために～

学校司書の支援

1. 4月に全クラス図書館オリエンテーションを実施し、朝読書の意義・ルールを説明
2. 教室へ出張ブックトーク、読み語りの実施
3. クラスごと、図書館で朝読書の実施

図書委員会からの働きかけ

1. 朝読書チェック票の作成と調査
2. 委員が選んだおすすめ本のクラス貸出

<柳町中学校> 学校図書館におけるボランティア

図書館のシステム化に向けて資料情報入力ボランティアを募ったことが始まり、保護者および卒業生の保護者で構成 1・2学期は資料の装備、3学期は蔵書点検が中心

成果：作業の様子を見ることで、生徒にも発見や感謝が生まれる。

課題：図書館を利用しない生徒にも、活動をPRしていきたい。選書等他の作業も考えたい。

<更埴西中学校> 地域とつながる図書館

1. 公共図書館とのつながり
2. 読み聞かせボランティアとのつながり
3. 市内学校司書とのつながり
4. 図書委員会・生徒とのつながり
5. 先生とのつながり

2 討論の概要

グループに分かれ、レポート・事例発表の感想や各校の取り組み・課題等について話し合った。

小学校 読書旬間では、各種ビンゴ（読書・クイズ・分類）の結果、貸出冊数プラス券を発行、福袋や図書委員活動やしおりづくりの体験を実施

授業のサポートのために先生とのコミュニケーションが大切であることはわかっているが、連絡を取り合うことが難しい。

代本板の使用は本を決まった場所に戻せるように使用しているケースや、個人情報に配慮して使用しないというケースがあった（課題になっている学校が多かった）

中学校 図書館に来てもらう工夫の景品は限界がある。

教室の学級文庫に図書委員が選んで本を置き、習慣的に図書委員が活動することによって、本棚も整っている学校がある一方、学級への貸出は管理が難しいという図書委員の希望から取りやめてしまったケースもあった。

3 まとめ

アイデアの詰まった興味深いレポート発表やさまざまな取り組み事例など、これからの学校図書館づくりのヒントがたくさんありました。学校司書を中心にいろいろな方々の知恵を持ち寄り協力して、魅力ある学校図書館をめざしましょう。

第 63 回図書館大会 第 4 分科会「力をあわせて魅力ある図書館づくり」

討議内容まとめ

ビンゴ 名称：読書ビンゴ・クイズビンゴ・分類ビンゴ→プラス1冊券や三冊貸出券

100冊スタンプ

福袋 図書委員が選んで包装、中身が見えないのでちょっとコメント

体験 図書委員活動・しおりづくり

スタンプラリー

縦割りペアで本探し

ビブリオバトル 先生方おすすめ

本の紹介・授業・調べ学習・連携

年間計画にあわせ、前もって掲示

授業をサポートするために先生とのコミュニケーションが大切

司書教諭や係りの先生との連絡を取り合うことが難しい（悩み）

調べ学習はパソコンを使うことが多く、図書館の利用は少ない（悩み）

公共図書館との連携

例：ネットワークでつながっているのでパソコンで予約

週一回配送やシルバーさんによる巡回で毎日可能なところもあり地域差が大きい

週一回時間割が入っているが、高学年はとりにくい

学校司書の作業が出来るように連続の空き時間を設けていると言う例もあった

雇用

パート・臨時など市町村により給与身分・継続方法・勤続年数もさまざま

個人情報・代本板・本の返却方法・貸出カード

個人情報保持のため予約等には気を使う その都度個人情報について説明

代本板の使用については本を決まった場所に戻せるようにするために使用している学校、個人情報に配慮して使わない学校に分かれる 本の戻し方も自分で返す・図書委員がまとめて戻す等

貸出カードはしおりのようにはさんで返却期限を知らせる方法として利用したり、借りた冊数を気にしたり記録になる一方、記入が面倒、時間がかかるという意見も…

ラベル・配架

タイトルと作者どちらの50音が正しい？（疑問）

全部同色で統一したら…（案） それぞれ類ごとに色分けしている学校が多い 桁数やカナも独自の方法も…

公共図書館と同じにしたら…（案）

中学：だいほんばんは使用していない 図書館に来てもらうための工夫は景品でつるのも限界があり、本を読むことにもつながらない動線にクイズを用意（答えは図書館）してもくるのは決まった子と苦労が多い様子

選書は希望ばかりを聞くことも難しい、不公平感が出ないように工夫している

月交代でクラス単位の利用時間を設けることによって、来館が習慣化してよい

ビブリオバトルを国語の1時間を使ってクラスで発表し合い、朝読書の時間に全クラスの頂点の決勝戦を行った

感想文コンクールの入賞作品をビデオ放送

朝読書は図書館の本を読むことが原則になっている 環境は学級文庫に図書委員が選んで教室へ置く本もあり習慣的に図書委員が活動してくれていて、本棚も整っている（うまくいっている例）

朝読書は週3回 ただし他の活動になる傾向がある 担任が不在のことが多い 学級への貸出は管理が難しいという図書委員の希望により取りやめた（悩んでいる例）

15のグループに分かれ、レポート発表・事例発表の感想や各校の取り組み・課題等について話し合った。

小学校

・読書旬間の工夫

各種ビンゴ（読書・クイズ・分類 など）結果 貸出冊数プラス券を発行したり、福袋や図書委員活動やしおりづくりの体験を実施

・授業・調べ学習・連携

授業のサポートをするために先生とのコミュニケーションをとることが大切であるということがわかっている一方司書教諭や係の先生方との連絡を取り合うことが難しいと言う悩みを抱えている

調べ学習はパソコンを使うことが多く図書館の利用が少なかったり、利用する場合も急に授業で使いたいと言われることがあり困る

各学年授業は入っているけれど、高学年はとりにくい傾向にある

公共図書館との連携はネットワークでつながっていて予約が出来たり、配送は週1回のところ、シルバーさんによる巡回で毎日可能なところもあり、地域差が大きい

・雇用

パート・臨時など市町村により雇用形態・継続方法・勤続年数もさまざま不安

・個人情報・代本板

個人情報保護のため予約連絡には気を遣っている 代本板については本を決まった場所に戻せるように使用している学校や個人情報に配慮して使わない学校と対応がわかれた

・ラベル・配架

案：ラベルの色を全部同じにする 公共図書館と同じにする

それぞれ類ごとに色分けしている学校が多かった

桁数やカナも学校による

中学校

代本板は使用していない

図書館に来てもらう工夫は景品というのも限界があり、動線にクイズを用意（答えは図書館）してもくるのは決まった子 月交代でクラス単位の利用時間を設けることによって、来館が習慣化するという事例もあった

朝読書 図書館の本を読むことが原則となっている 学級文庫に図書委員が選んで教室に本をおいて、習慣的に図書委員が活動してくれることによって、本棚も整っている（うまくいっている例）

週3回時間があるけれど、他の活動になる傾向がある 担任不在のことが多い 学級への貸出は管理が難しいという図書委員の希望により取りやめた（悩んでいる例）

第5分科会 分科会テーマ「図書館の管理・運営の在り方

～ソフト・ハード両面からの図書館づくり～」

助言者：氏名(所属)長野県総合教育センター教職教育部 依田 学先生

司会者：氏名(所属)飯山市立泰阜中学校 関島 真知子先生

発表者：氏名(所属)中野市立永田小学校 小林 真美子先生 小林 昌恵先生

氏名(所属)城北中学校 廣瀬 いづ美先生

1 発表の概要

① 永田小学校・実践発表

「図書館の管理・運営のあり方～子供が意欲的に取り組める読書活動を目指して」

・読書目標「100冊読もう！」

28年度55人中25人、29年度53人中29人達成。目標達成のため、賞状を渡す、貸出カードの色を変える、読書ビンゴ・読み聞かせなど興味を引くような仕掛けを作っている。

・図書館環境の整備

図書館前の掲示板や、テーマ本のコーナー、新聞の記事と合わせての本の展示など、子どもが手に取りやすいよう工夫を凝らしている。

・新聞・図書委員の活動

読書集会でペープサート劇やおすすめ本紹介、クイズなどを行っている。クジの日になっていて、貸し出し券が当たる。また、委員による新聞づくりをしている

・学習センター、学習センターとして、様々な用途に即した環境整備を心がけていきたい。

② 城北中学校・実践発表

「学校図書館に明かりを灯せ～城北中学校図書館司書の三年間の活動」

・課題 ①書架の配置と、図書館全体につながる暗い印象の改善

→環境整備のため、蔵書の廃棄・更新をし、館内の大幅なレイアウト変更を行った。

②生徒会活動の主体性を持たせる

→読書週間にビブリオバトル。近隣中学校で人気本ランキングの比較。

③授業支援への取り組み

→小中での調べ学習への協力。資料提供。

・図書館が広く、明るく使いやすくなった。授業支援で必要な資料の提案を受けたことで、廃棄により不足していた分野の資料を新規購入・補充できた。司書、司書教諭、先生方との連携を今後も続けていきたい。

2 討議の概要

グループに分かれて討議。二校の実践発表を受けて、または自校の現状・課題など

・**連携**：司書教諭と司書、公共図書館との連携が重要。他教科の先生など大勢の先生方に関わってもらおうと良い。

・**館内整備**：書架の古さやレイアウトなど気になるが資金面が課題。畳・ソファを置いてリラックスできるように（いたずらの心配もあり）エアコン設置の予定。本の大規模な配置換え。

・**ビブリオバトル**：6年生からやっている。進学後の本への関心に差が出る。発表体験は良い。

・**調べ学習**：基礎を小学生のうち身につけさせたい。・**取り組み**：英語でやり取りしている。

・**雇用・待遇面**：2校兼務などで時間が限られている。職員会議出ていない。子供のことをよく知らないのに、図書館で預かって欲しいと言われる。

3 まとめ（助言者の指導を含む）

学校図書館を主体的・対話的で深い学びの場に。情報センターとしての活用も重要。新しい時代に必要となる資質・能力を身に付け、柔軟な思考を育んでいくような図書館教育を学校・地域と連携して行っていきたい。

第6分科会 分科会テーマ「読書・学習センターとしての機能を推進するための取り組み」

助言者 岡田泰輔（中信教育事務所指導主事）

司会者 武居早苗（木曾町立日義中学校）

発表者 澤田知穂（駒ヶ根市立赤穂小学校） 唐木文恵（千曲市立更埴西中学校）

1 発表の概要

「明るく利用しやすい図書館を目指して～赤穂小学校の取り組み」〈赤穂小学校・澤田知穂〉
休み時間にできる本の予約、「もう一冊券」などの工夫により、年間一人あたり193冊程借りている。読書センターとしての取り組みの一つとして、スタンプラリーがある。駒ヶ根市内共通のスタンプラリーや赤穂小独自の「世界名作スタンプラリー」「日本昔話」「おすすめシリーズ」など、本に出合える機会を多く用意し、楽しく取り組み、普段手に取られにくい良書との出会いのきっかけとなっている。学習センターとしての取り組みとしては、駒ヶ根市の図書館を使った「調べるコンクール」が開催され、ガイドブックもあり、子ども達が調べ学習に活用している。

「読書センターとしての機能を充実を図るために」〈更埴西中学校・唐木文恵〉

読書の習慣化を図れるよう、本に出合える場の設定や環境整備に力を入れている。全校朝読書の取り組み、学校司書による読書環境の整備、図書委員会との連携、選書の工夫、ボランティアによる読み聞かせ、市立更埴西図書館との連携が挙げられる。不登校の生徒もいるが、図書館で季節の飾りを一緒に作るなど、心安らぐ「憩い」の場ともなっており、生徒の心に寄り添う司書の存在は大きい。また、教師側からの発信だけでなく、生徒側からの発信も大切にしており、図書委員による図書便りでは、文豪にまつわるエピソードや、名作間違い探しなどを盛り込んであり、名作への扉ともなっている。校内図書館は、市立更埴西図書館と併設されており、自校の蔵書だけでなく、公共図書館の本にも出合える場があり、選書の楽しみが広がるという利点がある。土日祝日や長期休みでは、学校図書館も地域の学習室として開放されている。

2 討議の概要

ビブリオバトル（本の紹介コミュニケーションゲーム）についての話題が多く出た。何年か継続して続けている学校がある。大好きな本を伝え合うことで相互理解が進む。その学年に合ったやり方で工夫できそう。ビブリオバトルを続けることで、読書の質が変わってきた学校もある。しかし、やり方をしっかり押さえておかないと難しい。司書が見本を見せるなど、やり方をレクチャーしてから取り組むことが大切。

3 まとめ

新学習指導要領「総則」の中にも「学校図書館を計画的に利用しその機能の活用を図り、児童の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に生かすとともに、児童の自主的、自発的な学習活動や読書活動を充実すること。」とある。学習センターとして利用するには、機能の充実を図ることが大切。主体的で深い学びのための一役を担う場とする。そのためには、より積極的に行うべきことがある。例えば単元計画を立てるときに蔵書を捉え直すこと。「こんな本があったらいいな。」と司書とコミュニケーションを取り、情報の共有をはかり、パートナーシップで図書館利用を進めていくこと。グランドデザインの中に図書館利用を位置づけている学校もある。

第7分科会 分科会テーマ「情報センターとしての機能を推進するための取組」

助言者：小林 洋一 指導主事（南信教育事務所） 司会者：吉澤 瑞代（安曇野市立堀金小学校）

発表者：上兼 恵理（松本市立菅野小学校） 馬場 ゆみか（富士見町立富士見中学校）

1 発表の概要

(1)菅野小学校…研究テーマ「自ら学び、豊かな心を育てる図書館教育はどうあったらよいか」

①学習・情報センターとしての活用のために、児童の実態に合った、調べ学習で図書館を活用する授業及びその計画と、情報活用能力を身につける指導計画が必要である。と考えた。

<手立て> ア 必要に応じて図書館を利用できる子どもを育てるための年間計画の見直し
イ 年間計画に基づいた各教科での利用促進
ウ 調べ学習で図書館を利用する機会の確保
エ 調べ学習を利用した記録の蓄積と本の補充
オ 市立図書館や地域の図書館などとの連携

②各学年・学級での実践

<3年>・図書館の工夫を知る→辞典や図鑑、科学読み物などの使い方を知る→調べ学習の進め方を知り、図書館で調べる。

<5年>・社会科「情報産業とわたしたち」における調べ学習

<6年>・菅野小の歴史あるいは修学旅行に向けての調べ学習

③全職員が年間指導計画に基づき、計画的に図書館を利用しながら、学習・情報センターとして活用する意識を更に高めどのような図書館でも通用する情報活用能力を育成していきたい。

(2)富士見中学校…中学校の学習を行う中で見えてきた生徒の困り感から、情報センターとしての機能を推進するための取組方法を探る。

①キャリア教育と情報センターとしての図書館利用

<計画> 1学年：職業興味診断

2学年：ジョブカフェ信州 出前講座 なるには教育 職業体験学習

3学年：進路選択

②学習を通して“図書館の必要性”が見えてきた。そして、事前学習での困り感から、活用できそうな書籍を使い質問の質を高めていくことができた。また、お礼状を書く場面での困り感からも、資料探しの必要性が感じられた。

③情報は必要に迫られれば、自分から探しに行くものである。図書館は生徒が主体的に学ぶ上で欠かせない情報集約施設となる。日々の学習から生徒の「もっと知りたい」という声を拾い、気軽に利用できる情報センターとしての図書館の利用方法を模索していきたい。

2 討議の概要（助言者の指導を含む）

- ・年間計画（図書館利用）があると活動しやすい。
- ・司書教諭、学校司書、担任、教科担任等でコミュニケーションを図り、連絡を取り合う。
- ・パソコンは情報がありすぎるので、必要に応じて、学校司書等に適切な資料を相談する。
- ・公共図書館の相互貸借を有効に進めていく。
- ・動画の教材、新聞複数購読等整備充実していく。

3 まとめ（助言者の指導を含む）

- ・情報センターとして活用する手立て…年間計画の見直しを進め、計画的に利活用していく。
- ・児童生徒の困り感に合わせた情報収集が必要。それが、見通しを持った主体的な学びとなる。
- ・記録の蓄積、データ化を進め、来年度に生かしていく。
- ・教科等の横断的情報活用能力を育てていくために、機会を確保し、調べ方を知り、活用する。
- ・図書資料の整備と配架を進め、他の図書館や公共図書館を利用していく。

第8分科会 分科会テーマ「高校生の読書に関する意識調査～アンケートをもとに」①
「学校図書館から発信します」②

助言者 なし 司会者 赤羽徳生（須坂高校）

発表者 ①春日マユミ（篠ノ井高校）更埜 SLA

②片倉智子（箕輪進修高校）片桐亜希子（伊那北高校）上伊那 SLA

1. 発表の概要

①H27 高校生の読書に関する意識等調査報告書（文部科学省）をもとに、更埜 SLA（全日普通科・農業科・商業科・理数科7校）として各高校各学年1クラスに意識調査を実施し報告。

- ・高校生の63%が読書が好きと答えながら、1ヶ月に1冊も本を読まない生徒が52%。これは、全国と同じ傾向。
- ・中学生と比べて高校生になって1日の読書時間や1ヶ月に読む本の量が減った生徒は7割。理由は時間がないが5割。読書は気分転換や物語を楽しむためにしたい。自分の好きな本をゆっくり読める時間と場所がほしい。
- ・生徒が本を読みたくするには学校図書館に高校生が読みたい本を置く。調べ学習を増やすことや推薦図書は生徒の意識では逆効果。

②長野日報へのブックリレー掲載。上伊那 SLA に所属する8校の図書係教諭・学校司書・図書委員生徒が月2回のリレー形式で。2012年度より継続中。

学校図書館をアピール・高校生の興味を持つ本を知ってほしいと始めた。

ブログ上伊那の高校生が選ぶ「読書大賞」高校生が選ぶ読書大賞を始めて10年。デジタルアーカイブとして残したい。タイムリーな配信で高校生の読書活動を知ってほしいと方法を模索。2018年6月開始。「い～な上伊那」に入れてもらっている。駒ヶ根工業高校 HPにも掲載。今後ブログのタグの研究、ロゴマーク決定、国会図書館カレントアウェアネスに登録などを考えている。

2. 討議の概要 討議よりも質疑が主でした。

①朝読書実施校はないので、0の生徒が多少多いかもしれない。また、夏休み中の方が読まない生徒が多く、電車通学中や休み時間などのすき間時間での読書が定着しているのかもしれない。高校での例)・ラノベをたくさん読む中学生は、高校になるとスマホに夢中になり読まなくなる。

- ・課題の量がとても多く、読書する時間が作れなくなる。
- ・進路が決まって初めて図書館に本を借りに来る生徒がいる。部活と勉強が落ち着き、本を読む時間ができたのでは。
- ・一斉読書でたくさん本を借り、その後も続けて通う生徒がいる。

②新聞への掲載の発端は、事務局から新聞社への連絡から。（新聞社は記事を探している）掲載の文字数は600字から800字で、新聞記事としておさまりがいい文字数。

読書大賞は候補作の決定まで委員で行い、全校生徒に呼びかけ、読んだ人が投票に参加できる。

テーマやポスターも募集して決定。ポスターは各高校、公共図書館、郡内の中学校に掲示。

読書大賞の投票数は全体で100～300。目立って貸出数が変わるわけではない。

3. まとめ

高校以外の参加者より

- ・中学のオリエンテーションアンケートの参考にしたくて参加した。中学生も忙しいので、委員会活動も難しい。（中学）
- ・ヤングコーナーに中高生がなかなか来ない。高校生で来るのは小学校のときからの利用者。ふらっと来た利用者にとってもらえる棚作りを考え、意識が知りたかった。数字があって良かった。（公立図書館）
- ・テスト勉強や長期休業中の学習はするが、本は借りない。時間がないことがわかった。データは今後の参考になる。高校 POP 大賞の展示をしているが、一般の利用者や別の高校生にも手に取られている。（公立図書館）

【第9分科会】

図書館の機能向上のために～図書館運営についての意見交換会～

発表者 宮崎 歩美（長野県立大学図書館）
司会・助言者 水津 幸江（長野工業高等専門学校図書館）

1 発表の概要

今年4月に開学した長野県立大学図書館の紹介と活動報告がなされた。

(1) 図書館の概要

短期大学時代の独立図書館と大学校舎内に新たに設けられた閲覧室を渡り廊下で接続している。その建物の構造を利用して、動のスペース・静のスペースの棲み分けをしている。新たに設けたグループ学習室は4室あり、授業でも利用されるなどだんだん定着してきて利用率が高い。2年次の留学を踏まえて英語多読本を重点的に揃えていく予定である。また、学外者の利用を開始した（利用できる場所の制限あり）。



(2) 活動報告

展示コーナーを利用し、教員著書や教員の推薦本を常時展示している。その他イベントとして、読書週間に合わせて「テツドク」（教員主導のもと指定された哲学書を読み意見交換を行うもの）や、学外からゲストを招いてのスピーチ、図書館謎解きゲームを実施している。中でも職員にもおすすめ本を紹介してもらう企画は、図書館に所蔵している資料を中心に紹介してもらうようにしたため、職員に対する図書館PRとしても有効である。

また、学習サポートとして、新入生全員を対象にガイダンスを実施し、希望するゼミ単位で図書館見学ツアー・情報検索ガイダンスを行った。実施時期については今後検討する予定である。

その他、茶道部とのコラボ企画や授業の成果発表の実施、1,000点を超える貴重な和装本の展示も今後計画している。

2 協議内容

事例報告を受け、教職員や学生に協力を得て実施されているイベントについてどのようにコンタクトをとっているのか質問があった。図書館職員から直接教員に交渉、職員への依頼は各部署の負担とならないよう事前にアンケートを依頼するなどの働きかけが結果につながっているとの回答を得た。

その後、事前に実施した「他館に聞きたいことアンケート」（29の項目について大学専門図書館部会加盟館20館から回答）結果をもとに各館の現状や対策方法について意見交換を行った。

- ・BDS（盗難防止システム）にICタグを導入している館は少なかった。ICタグの導入を検討しているが耐用年数について未知であることが課題であることが挙げられた。
- ・授業で図書館を定期的に活用される事例としては情報検索に関するものが多く挙げられた。
- ・

来年度、長野保健医療大学の加盟が報告されたほか、大学専門図書館部会の規約を図書館協会に提出することを確認した。

3 まとめ

長野県立大学図書館の積極的な取り組み事例の報告を受け、各館で刺激を受けることができた。また課題の解決方法についても参考となる情報を得ることができ、情報共有することで図書館運営に反映する貴重な機会、組織であることを再確認した。今後とも協力して活動していきたい。

第 10 分科会 分科会テーマ

「駒ヶ根市の幼稚園・保育園における読書活動と公共図書館との連携」

助言者 氏名（所属）なし

司会者 氏名（所属）下平 生美（駒ヶ根市保育協会）

発表者 氏名（所属）下島 美恵子（駒ヶ根市保育協会）

1 発表の概要

発表の内容は 1. 各園の取り組み 2. 駒ヶ根市立図書館との連携 3. 保育士の資質向上に分かれており、それぞれの活動の様子が写真を取り入れながら紹介されました。

1. 「各園の取り組み」では、①日々の本との関わりということで、子ども達が好きな場所でじっくり絵本を読む姿、図鑑で調べる姿、先生に読んでもらう姿、絵本を借りる姿等。②遊びに発展ということで、「きょうはみんなでくまがりだ」の絵本からごっこ遊びに発展した様子。「はらぺこあおむし」の絵本から劇遊び、壁面への製作遊びに発展した様子。③親子で…ということで、月に 1 度降園時にお話をしたり、参観日に親の膝の中で一緒に絵本を読んだり、絵本の貸し出し日に一緒に選ぶ様子が発表されました。

2. 「駒ヶ根市立図書館との連携」では、①ブックスタート事業… 6 ヶ月健診時に読み聞かせと絵本のプレゼントがされていること。②セカンドブック事業…読書習慣の形成に向けて 2 歳 3 ヶ月健診時に読み聞かせと絵本のプレゼントがされていること。③よみ〜くちゃん巡回図書事業…市内 13 の幼稚園保育園に読書支援として図書館からコンテナボックスで毎月 50 冊程の絵本が巡回されており、各家庭にも貸し出されていること。④おでかけ図書事業…読み聞かせの研修や講座を受講したボランティアの方が園に出かけ行き読み聞かせをしていること。⑤出前図書館…図書館の司書の方が園に出かけて行き読み聞かせをしていること。の様子が発表されました。

3. 「保育士の資質向上」では、①絵本の読み聞かせ講習会…子ども達に良い絵本と出会ってもらうためには、保育士自身が良い絵本を見極める目を養ったり、読み聞かせのテクニックを身につけるため、講師を招いて研修会を行っている様子。②保育士部会絵本グループ（駒ヶ根市保育協会内のグループ）の活動の様子。③絵本の製作… 30 年ほど前まであった民話グループのメンバーが駒ヶ根市に伝わる民話を聞きとって版画にし、製作したが絵本の紹介、その絵本を基にして「はやたろう」が出版され、今でも親しまれていること。が発表され、最後に「はやたろう」の読み聞かせがありました。

2 討議の概要

参加された方々より発表に関しての質問・感想をだしていただき、駒ヶ根市全体で読書活動に取り組んでいる様子が感じられた。子ども達がのびのびと絵本を楽しんでいる様子が見られた。等の感想がでました。その後各市町村・団体・保育園での取り組みの様子を話していただき、箕輪町での読育（どくいく）の様子や、ボランティアで読み聞かせに行くと、普段から読み聞かせの習慣があると、子ども達にも聞く姿勢ができていていると感じること。中川村の保育士からは、保育園で「はやたろう」の読み聞かせをしたら、とても気に入って毎日読み、光前寺に行きたいと子ども達から声が上がり、実際に出かけたり、その後劇あそびに発展したこと。南箕輪村では、視聴覚委員会で、各年齢ごとに絵本を紹介したり、貸し出しも行ったり、寝かしつけにスマホを見せている家庭が増えているので、読み聞かせの大切さを知らせる手紙を出したりしていること。伊那市の分館では年々貸し出しが減っていることで、これからも図書館を活用してほしいと感じていること。等さまざまな話が出て、有意義な時間になりました。

3 まとめ

発表の最後にもありましたが、これからも日々の読書活動や図書館との連携を大切にしながら、子ども達が絵本大好きになり、情緒豊かな人に育ってくれることを願いながら、それぞれの立場で活動を続けていきたいと思えます。

第 11 分科会（開催地企画）

分科会テーマ「こどもの心に届くおはなし会をめざして」～駒ヶ根市立図書館の取り組み～／語り・わらべうたの実演～読み聞かせ支援のあり方を探る～

司会者：氏名(所属)下島孝夫（駒ヶ根市立図書館ボランティア）

世話係：霜田里美（中沢小学校長） 記録者：小野裕希（南箕輪村図書館）

発表者：語り発表 市岡福美、田中和子（駒ヶ根市立図書館ボランティア）

わらべうた発表 馬場美保子（駒ヶ根市立図書館ボランティア）

企画・発表：高柳麻紀、村松直美（駒ヶ根市立図書館）

会場内展示：駒ヶ根市立図書館の子ども読書活動支援の資料・語りやわらべうた関連本

1 発表の概要

①～⑤は、参加者は椅子に座り、発表者の発表や実演を見る形式

⑥は、椅子を端に寄せて、参加者が体験する形式

① オリエンテーション（5分）本日のテーマ・予定・担当紹介（司会者）

② 語りの実演（10分）『山犬と馬頭観音』ふるさとの民話 ～伊那・駒ヶ根・上伊那より執筆
者 小林正子～（市岡）

③ 実践発表（15分）「駒ヶ根市図書館の取り組み」について、職員よりレジュメとスライドを使って説明。「子どもの支援活動」について、具体的な活動事例や今後の取り組み課題についての発表。きめ細やかな子ども読書支援とボランティアとの密な連携と活動支援等が紹介され、今後の各支援の充実についても触れる。（村松）

④ 語りの実演（10分）『マーシャとくま』F・ラチョフ／絵 M・ブラトフ／再話
内田莉沙莎子／訳（田中）

⑤ 実践発表（15分） 「わらべうたの力」と題し、わらべうたの歴史と駒ヶ根市立図書館におけるわらべうたの導入事例について、図書館ボランティアよりレジュメで説明。幼い内より、わらべうたで遊ぶことで人とのつながり、本につながっていくことに触れる。（馬場）

⑥ 実演・体験（33分）馬場さん指導によるわらべうたの体験。二人一組で、「顔遊びや手遊び」のわらべうたや、全員で「集団で遊べるわらべうた」の体験・遊び方のポイント解説。

～休憩（5分）～ グループ討議ができる椅子の準備もあわせて行う。

2 討議の概要（40分）

7グループ（A～Gグループ）に分かれて、グループ討議。（ABのみ7名、他6名）

司会者がグループ討議の進め方について説明。グループ内で自己紹介をした後、リーダー（司会・発表）と副リーダー（記録者）を求めて、次のテーマについて話し合う。

① （ア）「ボランティアの方が学校・図書館職員にサポートしてほしいこと」

（イ）「学校・図書館職員がボランティアへ期待していること」

② 「子どもの心に届くおはなし会にするために～選書やおはなし会のプログラムで心がけていること、工夫していること」

3 まとめ（助言者の指導を含む）（15分）

グループ内で、それぞれの立場で現状を踏まえての意見を話し合う。活発な意見交換後、全体会としてグループの意見を各グループのリーダーが発表。終了後、副リーダー（記録者）は、記録用紙を提出。

① （ア）「司書がつなぎ役としての役割を期待」、「先生方に場を共有して欲しい」、「時短などの場合連絡早めをお願いしたい」、「お話し関連の荷物保管場所があれば」など。

（イ）「季節、年齢を考えたプログラムに感謝」、「ボランティアの存在が新しい風になっている」、「ボランティアの高齢化。後継者育成必要」、「地域の語りを取り入れたら」など。

② 「母親も楽しめるおはなし会に」、「手遊びやわらべうたを取り入れる」など。 以上

第 12 分科会

分科会テーマ「わたしたちの図書館」を目指して ～市民と行政による図書館運営に向けて～

発表者：氏名(所属) 掛川裕介 (市立小諸図書館) 氏名(所属) 大林晃美 (市立小諸図書館)

1 発表の概要

1. はじめに (自己紹介、分科会の流れの確認)
2. 事例紹介 (市立小諸図書館の取り組みから) 25min
3. 実践活動 (具体例についてグループワーク)
 - ①中学生から「公共図書館にテレビゲームを置いてほしい」と相談されたら 30min
 - ②市役所が「公共図書館の指定管理化についてのWS」に参加するとしたら 30min
 - ③全体共有 (グループワークの経過や結果を全体で共有) 20min
4. まとめ (分科会設定の意図について)

2 討議の概要

事例紹介では、小諸市の取り組みとして、本年度に受賞した日本図書館協会建築賞と来年度に予定される業務委託のプロポーザルを起点に、平成 20 年から始まった新図書館建設の動きに沿いながら現在の小諸図書館 (とそのサービス) がどのように形成され、これからの小諸図書館が目指す「わたしたちの図書館」について発表しました。

実践活動では、参加者を 3つのグループに分け、発表者が指定するテーマについて対話による検討を行った。テーマは上述のとおり、「中学生からテレビゲームを置いてほしいと相談された場合」についてと「市役所が主催するワークショップで「公共図書館を指定管理すること」を考える場合」とした。各グループでファシリテータが関わりながら対話し、その後に対話の成果を発表し、全体で各取り組みを共有した。



3 まとめ (助言者の指導を含む)

本分科会では、その目的を「これからの公共図書館について各館が考え、行動するきっかけづくり」「多様な考え方をもち得る公共図書館への問いかけに対し、お互いを尊重しながら対話することの体験」として設定しました。前者については、その目的が達成されたかは分かりかねますが、後者については全体共有での各グループの取り組み発表から、参加者それぞれの背景や考え方に基づく意見をお互いに聴きあう中で対話が繰り返され、多様な議論への展開がなされたことが伺えたことから、達成されたものと考えます。また、参加者に公共図書館職員の他にボランティアに関わる方や協議会の方、議員などが含まれていたことにより、意見や議論の幅が出たことは好都合でした。一方、参加者の背景やワークショップの経験の有無などを事



前に把握することで、グループワークのファシリテートをもっと円滑に進行できた可能性については反省とします。発表者としては、図書館大会の分科会を受け持たせていただき、貴重な経験をさせていただき、また、自分自身の足りない部分や今後考えていきたいコトに気付くことが出来ました。図書館に携わる者の「学びの機会」「経験の機会」として公募型分科会を今後も継続していくことは十分に有意義なことだと考えるとともに、ぜひ多くの関係者が怖がらずに手を挙げていただければと思

います。